

JDA 春期ディベート大会 第 10 回記念モデルディベート

論題：日本はすべての原子力発電を代替発電に切り替えるべきである。是か非か。

2004 年 3 月 13 日

小西卓三 vs. 矢野善郎

解説：飯田浩隆

編集：安藤温敏

はじめに

2004 年 3 月 13 日、東京農業大学（東京都世田谷区）にて、JDA 春期ディベート大会第 10 回記念イベントとして、モデルディベートが行われた。本トランスクリプトは、このモデルディベートの様子を記録したものである。

モデルディベートの論題は、「日本はすべての原子力発電を代替発電に切り替えるべきである。是か非か。」なお、本論題は、2004 年ディベート甲子園高校生の部と同じ論題である。このディベートにおいて、肯定側は小西卓三氏（東海大学講師）、否定側は矢野善郎氏（中央大学講師、日本ディベート協会副会長（当時。2004 年 4 月より会長。））で、試合は、飯田浩隆氏（日立製作所）の司会・解説のもと、進められた。

このディベートは、1 人制ディベートの形式で行われた。フォーマットは以下の通り。

肯定側立論	: 5 分
否定側質疑	: 3 分
否定側立論	: 7 分
肯定側質疑	: 3 分
肯定側第一反駁	: 3 分
否定側反駁	: 4 分
肯定側第二反駁	: 3 分

本トランスクリプトは、ディベーターの協力の下、当日録画されたビデオテープを基に作成された。明らかな言い間違い、不適切な表現を除き、極力ディベーターが喋った内容をそのまま記録している。

このディベートにおいて使用された証拠資料は、あくまでディベーターの引用どおりに掲載しており、著者の実際の意図と異なる引用であったり、出典等が誤っている可能性がある。

本トランスクリプト中で引用された資料を他で再度引用する場合は、原典を調査・確認した上で使用していただきたい。

肯定側立論：小西卓三

それでは、ディベートを始めます。

石油で作っても、石炭で作っても、ガスで作っても、太陽光等の発電方法で作っても、基本的に、できてくる電気は電気で、質に変わりはありません。ですから、発電の方法というのは、より安全な方法にシフトしていく方が、望ましいと考えられますので、私は 2020 年までに、日本はすべての原子力発電を代替発電、すなわち、石油火力、石炭、ガス、風力、太陽光発電、廃熱を使うコージェネレーションなどのミックスに切り替えていくべきだと主張します。

まず事実認識として、2003 年 9 月現在、日本で運転中の原子力発電所は 52 基、建設中のものが 4 基、建設準備中のものが 8 基存在していると、原子力白書、平成 15 年度版は伝えています。

そして、今年の 2 月 25 日...先月ですけれども...朝日新聞の記事によると、政府が、今後 10 から 13 基作る予定であった、原発の計画というのを、エネルギーの需給見通しを踏まえた上で、4 基から 6 基程度にとどめる予定である、という報道がなされています。

それでは、この事実認識を踏まえたところで、原子力発電をやめるべきであるという根拠を、3 点述べたいと思います。

まず、第一点目に、原子力発電というのは、一旦大事故が起ってしまうと、被害が甚大になる。ですから、やめたほうがいいと思います。日本というのは基本的に地震災害の多い国ですから、活断層——地震が起こったときに、地面が割れてしまうところですね——このような、活断層がある敦賀半島にです

ね、7基も原発が存在しているという、そして運転をしている、という状況がありますので、実際こういうところで、地震で建物下の岩盤が壊れる、ですとか、それが起こらなくても、津波によって、冷却システムがきちんと機能しない場合、炉心熔解になりかねない、ということがあります。

例を挙げるのでしたら、炉心熔解にあたるような大事故——有名なのはチェルノブイリですけれども——例を挙げるまでもなく、多くの人が白血病・ガンにかかるですとか、周辺環境に対して、放射能汚染などが起こってしまう、ということがあります。

第二点目に、原子力発電をするためには、ウランを作らなければいけないわけですが、その転換・再転換・濃縮の過程で起こる事故も看過できないものです。

JCOの臨界事故というのは、気体状のウランを個体状に変えるという、再転換の過程で起こったものですが、事故処理のまずさ等もあって、周辺住民も被爆する自体に陥りました。で、労働者も死んでいる、ということが起こっています。ですから、炉心の熔解という大規模な事故が起こらなくても、このような危険と隣り合わせの発電方式ですから、これは止めた方がいいだろう、と。

そして、三点目ですが、原子力のゴミですね、これが年々負の遺産として引き継がれていく、ま、押し付けていく、という形になってしまいます。

理学博士の藤田祐幸氏が述べたところによると、「通常規模の原発を一年間運転させると、炉心には、広島原子爆弾が放出した死の灰の千倍ほどの放射能がたまる。」ということ、彼は報告しています。ですから、日本で52基も原子力発電所があるわけですから、毎年毎年それだけの死の灰を、日本にためていってしまう方式である、と。ですから、止めた方がいいだろう、と。

そして、やめたときに、じゃあ、電気をまかなえるのか否か、という点に関しては、需要が伸びていかない、という予測が、政府筋からも出ています。

これは、朝日新聞...先ほども述べた、2月25日の記事ですが、経済産業省が公表した、長期エネルギー需要について...に関する予測で、エネルギー消費が、産業構造の変化などもあって、2022年度をピークに減少していくのではないかと、ということが、言われています。

ですから、このような、需要が伸びていかない状況では、原発なしでも、他の発電方法でまかなっていきける、ということが言えます。

実際、去年、原子力発電を止めた、ということがありましたけれども、他の発電方式でまかなうことができている、ということもありますし、発電設備量、すなわち、どれくらい発電できるか、という観点から見ても、日本の現時点での設備量で、もう問題ない、ということが、言われています。

これはちょっと資料の引用になりますけれども、2001年の最大電力というのは、1億8090万キロワット・時であったが、原発を除く、火力、水力、地熱などの、発電設備量は、2億1648万キロワットである。電力...燃料調達の増加や、水力発電の運転を左右する降水量などを考慮しても、十分に余力はある、ということ——これは、エネルギー・経済統計要覧をもとにした、結論なんですけれども——ですから、他の方法を使って、発電所をガンガン動かしていく、もしくは、足りなくなった場合には、作っていくことで、電力供給ができる、ということが言えます。

ですから、このような代替方式が実用的である、という現状の下では、危険を避ける発電方式に移行していくのが、望ましいと言えます。以上です。

否定側質疑：矢野→小西

矢野：よろしくお願ひします。まず、一番最初に、聞きたいのですが、安全というのを非常に重要視されているわけですよね。

小西：はい。

矢野：肯定側の質問...要するに、代替発電というものの中には、どういった内容のものが含まれているんですか。火力発電は含まれてますよね。

小西：そうです。

矢野：そこら辺は、事故とか起こさないんですか。

小西：起こすでしょうけれども、起きたときに原子力の死の灰が降って、何万年もそれがこう...残ってしまう、ということはない、そういう意味では、まだましであるだろう、ということなんです。

矢野：はい。安全、という観点からすれば、必ずしも完璧ではない、ということですね、代替発電というのは。

小西：完璧ではないけれども、程度の問題で言うと、まだましであろうということですね。

矢野：はい。他の提案を聞いて見ましょう。原発の安全性に関して、活断層の近くに原発が建っている、ということをおっし

やいましたが、こういった活断層の近くに建っているということは、安全設計には組み込んでいないんですか、日本政府は。

小西：多少組み込んでいた部分はあるとは思いますが、でも、実際このような、活断層が割れる、ということまでは想定してないと思います。

矢野：活断層の上にはないですよ。近くにある、という証拠ですよ。

小西：そうですね。

矢野：近くにあるだけで、事故がおきる、という風なことは証明されていますか。

小西：ええ、実際、津波等が起こったときに、冷却水等に問題が起こる。冷却システムに...

矢野：その確率はどのくらいと見ているんですか。

小西：それは示していないですね。

矢野：私の手元にはですね、外国の評価で、千万年に3~4回、一年に一つの炉で起きるという数値があるんですけども、その数値というのは、大げさだと思いますか。

小西：なんともいえないですけども、一応、そういう評価がある、というのは存じてます。

矢野：千万年に3~4回という数値がある、ということですね。では次に行ってみましょう。チェルノブイリ原発というのを、日本のあれになぞらえてましたけれども、チェルノブイリ原発というのは、私が調べたところだと、黒鉛型という、日本では使っていない、非常に特殊な原発で、それが事故の原因だった、という報告を聞いているんですが、それは、認識として間違ってますか。

小西：そうですね、日本は軽水炉型というもので、炉の方式そのものは違う、と。

矢野：軽水炉型で、メルトダウンという、最悪のチェルノブイリ型の、事故を起こした、というケースは、世界ではどこかにありますか。

小西：メルトダウンは起きてはいないですね。

矢野：はい、じゃ、代替発電のところに行ってみましょう。太陽光発電というのは、原発と同じ出力を出すためには、実は、70平方キロメートル、山手線の中全部が必要だ、というデータが私の手元にあるんですが、これは間違ってますか。

小西：読んではないですけども、まあ、間違っていないと思います。多量の用地が必要ということには同意します。

矢野：ということは、基本的には、そんなに...太陽光発電なんて増えて行かなくて、火力発電が、結局肯定側のキーになると、私は踏んでいるんですが、これは、間違いでしょうかね。

小西：ま、火力も、その一つに挙がっている、と思います。

矢野：太陽光発電は、やっていけるんですか。要するに山手線の中の規模のを日本で何個も作っていけるのか？原発は50基あるんですよ。

小西：山手線規模のものは、出来ないけど...、

矢野：東京には出来ないですよ。

小西：小規模のものはいくつか出来ていくとは思いますが。

矢野：ということは、太陽光だけでは、かなり不足するとは思われませんか。

小西：そうですね。ですから、他の施設も、私は、代替発電の中に入れて、という感じです。

矢野：はい。じゃ、[終わります]

否定側立論：矢野善郎

否定側はですね、基本的に、こういう立場をとります。原発は、基本的に、肯定側の言うように、危険な発電方式である、それは認めます。ただし、否定側は、危険であっても、いや、危険であるからこそ、国内では原発を作りつづけなくてはいけない、日本にはそういう責任があるんだ、ということを論証しようと思うんですね。

ではまず、一番の大きなフレームワークとなる、価値基準に関して述べようと思います。

二つあります。一つ目は何かというと、エネルギー政策に関しては、安全だけじゃなくて、安定も重要視しないといけない、ということです。エネルギー供給が安定していない限りは、経済文化活動が阻害されるだけではなくて、病院や老人などの施設を直撃した場合には、死につながることもあるんです。つまり、死活原則に関わってくる。要するに、一年だけ供給できたって駄目で、一年も欠かさず供給できる、というのが、エネルギー政策の根本です。

第二の点は何かということ、供給するために、自国のことだけを考えていたのでは駄目なんです。つまり、日本に、多少得になるからといって、その結果として、他国を犠牲にするような政策は、やってはいけない、という原則、これを取ろう、ということを主張します。つまり、他に害を与えるような政策だったら、日本はちょっと我慢しなきゃいけないよ、と、こういう政策基準というのを皆さんに訴えたいと思います。

こういう政策基準を取った場合には、実は、肯定側のシステムでは駄目で、現状でも駄目で、否定側は新たなシステムが必要

であると考えます。それを二つに関して述べようと思います。一つ目は何かというと、基本的には、原発は現状どおり使いつづけます。それどころか、むしろ、現状よりも補助金を与えてでも、7基までは、最大で、原発の建設を認めようと思います。ただし、ブルサーマル等やプルトニウム産出というのは、もう一切、事業を打ち切ることとします。

二点目は何かというと、原発輸出というのを停止しよう、ということ。これから証明しますが、日本は原発を輸出しようとしています。それを、一切、あらゆる日本の法人が輸出できないように停止・禁止する法律を作る。もちろん罰則も相当厳しいものを作ろうと思います。

こういった代替のシステムは、当然のことながら、原発を廃止しないので、論題とは全然無関係です。ただし—まあ専門用語で言うと競合性というのですが—二番目の論点に関しては、肯定側のシステムとは、実は両立可能なんです。ただし、これから証明しますが、肯定側のシステムと、二番目の、原発輸出の禁止、というのを一緒にやった場合、非常に損をするので、やるべきではない、ということ論証しようと思います。その論証をするために...あと、代替案が優れているということ論証するために、二つのメリット—原発を使いつづけるメリット—を述べよう、と思います。逆にいうならば、これは否定側から見たら、肯定側のデメリットです。

利点の1は、安定したエネルギー供給ができる、ということです。

質疑でも確認したように、太陽光発電とかは、事実上、言うなれば、役に立たないんですね。それどころか、結果としては、石油発電のような、火力発電に頼るようになる、というのが否定側の未来予想です。となると、日本では原発を廃止するということは、事実上何か、というと、石油に頼らなくては行けない、ということですね。ところが問題は、アジアでは、経済というのは良くなっていますから、2020年にはどうなるかというと、資源エネルギー庁の試算によれば、アジアでの石油の需要というのは、3790万バレル、ということは—これ、一日なんですけれども—これは、倍になる、という話なんです。しかも、石油というのは基本的に中東から来るので、中東の石油を、アジア中がですね...実は、アジア各国を平均すると、56%中東に依存する、という状況ができてしまう。今よりもはるかに高い依存率になっちゃうんですね。そうなるとどうなるか。中東に依存する、ということは、中東に何かがあって、石油の供給が止まったら、アジア中がばたばたと倒れてしまう、ということなんです。で、それを防ぐためには何をすればいいか、とい

うと、日本の原発というのは、やっぱり残さないといけない。中東が倒れる、というのは、もう非常に簡単でして、1974年から考えるとですね、中東戦争も何回もあったし、イラン・イラク戦争もあったし、パレスチナ問題もあったし、もう、十年に一回は必ず戦争が起きて、必ずエネルギーショックが起きているんですが、なぜ日本は大丈夫だったかということ、原発があったからなんです。だから、原発というカードを残す、ということは、安定した供給のためには必須と言えるのです。その点では、もう、原則1で言うと、自国のためには原発は必須です。利点の2に行きましょう。利点の2は何かというと、原発輸出の危険性を最小限に食い止めよう、ということです。最小限に、というのはどういうことかということ、まず、未来予測をしましょう。日本はこのままでは確実に原発を輸出します。というのは、さっきも述べたように、アジアというのは石油に頼らざるを得なくなって、皆が食い合いをするわけですから、原発を作って、石油に頼るところを逃れよう逃れようと、アジアの...今の、発展途上国というのは、しようとしているんですね。発展途上国だけでなく、インドネシアとか、中国とかは...例えば朝日の1999年の記事によれば、「...中国、台湾、インドネシアなどでも原発計画がある。」実は日本の原発輸出というのは、日米原子力協定によって、厳しく制限されているんですね。ところが、1999年の朝日によると、台湾に関してのみ、技術供与という名前で、日本はもうすでに原発輸出を開始しています。ただし、本格的には、まだ動き出していないんですね。問題はこれからなんです。アジアからの圧力と、原発産業の圧力というのもあるんですね。というのは、日本で、原発のキャンセルが続いている状況に関して、小村浩夫、静岡大学教授によれば、「日本の原発業界は...」日本のキャンセルが続いたので、「...アジアへの輸出に賭けるしかなかった [中略] ターゲットになっているのは、台湾・ベトナム・インドネシア・タイです。」と述べているんですね。こういったことを受けて、政府はどのような態度をとるかということ、これに関しては、非常におもしろいデータがあって、甘利さんという、自民党代議士で、自民党のエネルギー政策小委員長という、お偉方がこう言っているんですね。「アジア地域全体を視野に入れた [中略] 原子力のプラントと運転技術までを含めた輸出を検討していく必要がある...」2003年の8月に、こんなことを言っています。ということはもう、政府は事実上、時間の問題として、原発輸出を、多分解禁するだろう、ということです。こうなったときに、肯定側のプランというのは、それを防ぐことができるかということ、絶対に防ぐことはできません。というのは、むし

る逆に、原発輸出をしようという態度に関して、火に油をかける...火に油をかけるどころか、ウランまでかけちゃうくらいにですね、多分、輸出圧力というのは高くなるんですね。2020年に日本の全原発を閉じてしまうわけですから、今技術があるうちに、アジアに売っぱらってしまおうという動機付けを与えるだけのことなんです。それに対して、否定側のシステムはどうかというと、三点において優れていると思います。一点目は何かというと、原発輸出の圧力というのは、日本内にマーケットがあるから、アメがあるわけです。あと、ムチも与えるわけですから、輸出をしようとしにくくなる。二番目は、アジアの諸国も、日本が原発を使いつづけている限りは、石油の需要はそんなに増えないわけですから、原発をあえて作るうちは思わないでしょう。三点目は何かというと、これは非常に重要なのですが、原発というのは40年寿命があって、20年間—寿命が終わった後も—廃炉まで、かかるんですね。つまり、60年間も面倒を見なきゃいけないんですが、肯定側のシステムでは、2020年に日本が原発をやめてしまう内容なので、技術者は2020年にいなくなっちゃうんです。要するに、原発がなくなるであろう2020年から60年後のことを考えたら、日本のシステムでは、技術者を...もう、もたせないんですね。その点否定側のシステムは明らかに優れていて、60年後まで、原発輸出が仮に起こったとしても、面倒を見ることができるシステムになっているわけですね。その点で例えば、自然エネルギーの推進者で有名である、佐和隆光、京都大学教授ですら、2001年にこう言ってるんです。「もし将来に必要だとすれば、原子力技術を維持するために、公的な援助で一定数の建設を続けることが必要かもしれない。」つまり、技術のためには、維持するのも必要かもしれないよ、ということです。

肯定側のところに関しては、もう時間がないのでやめますが、基本的にはここら辺の危険は、全て、アジアに関して、輸出されたら全部移転してしまう、ということです。それどころか、日本は非常に厳しい反対運動とかがあったり、政府の厳しい法律があるんですが、アジアではそういう保障はされていないので、むしろ、危険は、輸出のために倍増するであろう、ということです。そういった意味で考えると、責任ある態度としては、日本で作りつづけて、輸出を止めよう、これしかない。否定側に一票、お願いします。

肯定側質疑：小西→矢野

小西：じゃあ、質疑を始めさせていただきますけれども、火にですね、ウランを注いだらどうなるんですか？（笑）

矢野：え〜とですね、私のやってみた実験ではですね、（笑）まあ...燃えないと思いますね。ウラン235というのは大部分が金属ですので、ただ単に燃えないでしょうね。

小西：それではですね、代替のシステムというのは七基までは原発を作って、輸出は止めさせる、と。けれど、メンテナンスの技術供与はやっていく、ということよろしいですか。

矢野：はい、そのとおりですね。

小西：その代替の案の利点の一番目...すいません...その前にちょっと戻って、二つ出ている価値基準の中で、一点目は、エネルギー供給...エネルギーの安定供給が大事だ、ということよろしいですか。

矢野：価値原則の第一は、安全だけではだめで、安定も必要だ、ということです。

小西：二点目というのは、他国を犠牲にしてまで、自国の利益を得てはいけない、ということですね。

矢野：要するに、ちょっと得になるからといって、他国に害を与えていいなら...要するに、戦争をやっても、という論理へ最後はいくと思うんですね。で、そういった事を防ぐために、この原則は、非常に重要だと、私は考えていますし、皆さんにもそう考えて欲しいと思います。

小西：はい。今、現状の中で、原子力発電というのは輸出したいという方向が、日本にはある、と。

矢野：ええ。実際に技術供与という限定された状況では、台湾でもう既に、飯田さんのいる日立などが（笑）、輸出してるんですね。

小西：分かりました。いま、やってる、と...

矢野：いや、部分的に...だから、台湾の、その...

小西：技術供与して、やっている、と...

矢野：止めてます。まだ工事も終わっていないし、終わる目処が立っていません。

小西：はい。では、代替システムの利点1ですけども、石油の需要が伸びていく、ということですけども、これによって、中東に依存度が高まるから良くない、ということで、よろしいですかね。

矢野：そうですね。危険が増すような地域...特に、世界で一番危険とも言える地域に、一番石油が集まっているので、安定した供給という観点からすると、非常にリスクな状況である。さらに...

小西：供給が止まる、もしくは供給が減る、とか、そういうこ

とがあり得る、と...

矢野：そうですね。で、今の状態だったら、供給が減っても、石油なしでもやっていけるように、原子力がある、ということです。

小西：最後の点ですけれども、輸出が今から起こっていくとか、検討されている状況においては、メンテナンスをしていく事が必要であろう、ということですか。

矢野：輸出が起きた後のことを...輸出は必ず起きるし、肯定側のシステムでは防ぎようがないのですが、否定側のシステムでも、防ぐ保障はないですね。ただし、どちらが、その後、優れているか、といったら、最後まで責任を持てるような、否定側のシステムの方が優れている、と...

小西：メンテナンスは、今から輸出をしていくと、必ずやっていく、ということは立証されていますか。

矢野：基本的には、否定側のシステムでは、原発の輸出というのは禁止するんですが、安全供与だけは、積極的に推進しようということです。だから、そういった点では、ま、一応...証明としては不十分かもしれないですけど...一応やることは証明されているんです。

小西：了解しました。以上です。

肯定側第一反駁：小西卓三

それでは、肯定側の第一反駁を始めたいと思います。

今一度言いたいこととしては、安全性というのは、非常に重要な概念ですから、電力供給においては、安全性が確保される方向を取った方がいい、と言いたいと思います。

原子力発電の場合、爆発が起こった場合、その後の影響というのを考えた場合は、年数の長さから言って、他の発電に比類できない危なさがあるわけですから、その点を踏まえた上で、原子力発電は一刻も早く止めて、他のシステムに移っていったらいいかと思います。

そして、否定側の二つの基準ですけれども、安定供給というのは、後で、大丈夫だということを言いたいと思いますし、他国に犠牲をかけてはいけな、ということに関しましては、実際やめた、と決定するのは日本の私企業で、相手の...外国がやっていくことに関して、わざわざ関与してまで、経済活動を止める必要はないわけですから、その部分は基本的に無視して構わないと思います。

そして、代替システムについて、代替システムの利点の1とし

て挙げていた安定供給の話ですけれども、安定供給というのが、難しくなるのではないかと、いうことを言っていましたけれども、安定供給ができなくなる、という立証は、まずもってなされていないわけですから、基本的にこの部分は、否定側の論として、非常に弱いと思います。そして第二点目に、基本的に今まで中東で戦争等あって...昨年も戦争があつて、いまだに続いているような状況ですけれども、このような状況であっても、供給というのは今だにできているわけですから、長期的に見ても問題ないと思います。そして「中東に危機が起こったとき」と言っていますが、次の危機がいつ起きていくのか、というのも、基本的によく分からない状況ですから、いままで問題なかった、ということを踏まえてですね、将来的にも大丈夫だろうと考えられます。

そして、肯定側の立論で述べたように、今からエネルギー需要というのは、長期的には伸びていかない、という予測がでていますので、その状況のもとでは、原子力を抜いた状況でも、供給というのはやっていくことができるわけですから、安定供給という点に関しましては、大して問題が出ない、ということが言えます。

そして、リスク管理...二番目の、リスク管理についてですけれども、基本的に、非常に重要な点としては、原子力発電は一刻も早く止めた方がいい。それはなぜかという、年々、死の灰の1000倍にあたる、核...悪い物質というのが日本の中に溜まっていく、と。で、かける50基以上ですから、これはもう、早目にやめたほうがいい、と言えます。そして、輸出に関しては、今もあって、今からも起こっていくわけですけれども、否定側が示していないのは、日本が今から売ろうとしていったときに、実際売ることができるかどうか分からないわけです。他国が「日本が嫌だ」とか「他の国から買いたい」と、そういった部分で、競合に負けてしまう、入札に負けてしまうこともあるわけで、その点はわかりません。

そして、非常に重要になる点というのは、メンテナンスができるかどうか、という点ですけれども、この点は、供与できると思います。なぜなら日本は今まで何十年も原子力発電を動かしてきているわけですし、2020年までに、それを止めていく、というわけですから、始めて、止めるまでのプロセスというのは、日本は得ることができるわけですね。ですから、そこで蓄積された技術というのを、供与して、メンテナンスの部分が問題ないようにしていくことができるので、問題は起きない、と思います。以上です。

否定側反駁：矢野善郎

では、否定側のまとめのスピーチをしたいと思います。

否定側の原則から、また振り返って見ましょう。原則は何か。要するに、エネルギーというのは、安全であるだけでは駄目で、安定してなければいけない。これは、完全に相手も、基本的には認めていると思うんですね。つまり、一年でも駄目な年があることを避ける、ということは、非常に必須なことなんです。一番弱いところに、大体的場合、害が行くんですね。病院や、例えば、老人施設に行く。例えば、一例を挙げると、去年のフランスの...先進国のフランスでも、猛暑というのに対応し切れなかったために、八月の前半だけで、例年より1万3000人余計に死んでいるんです。これは原発よりはるかに、実は、ダメージが大きいかもしれないんです。つまり、一年でも欠かす、ということの重みを、持ってください。

二番目は何かというと、仮に日本でのリスクが落ちたからといっても、他国で同じかそれ以上のリスクが起きるような政策だったら、やる価値はないんです。日本の安全だけを守ったらい、なんていうのは、非常に狭い政策判断なんですね。あと「肯定側は」もう一点言いました。「企業のやることに、国は介入するべきではない」そんなことは、絶対ありません。例えば、食品の安全もそうですし、冷戦下でもそうですし、今でもそうですし、核兵器の輸出をするような企業を止めようとするのは当然なんですね。危険に加担するような企業を止めないで、何のための国家なんですか、と、私は聞きたいですね。皆さんも、そういった原則に従うならば、やっぱり、否定側の言っていることは非常に重要だ、という観点から、試合を判断してください。

では、否定のシステムを確認します。否定側のシステムは、原発は作りつづけますが、輸出は厳禁する、というシステムです。これに関しては、基本的には、競争性等に関しては認められた、ということでもいいでしょう。つまり、ここでの勝負は、肯定側のシステムと否定側のシステムが、どちらが良く、原発の危険性...危険である原発を、世界の中でリスクを減らすことができるか、この点で否定側の方がはるかに有利である、ということの説明しようと思います。

まず、メリット1から見ていきましょう。メリット1は安定供給、ということでした。小西君は、こう言ったんですね。「否定側は、安定供給が足りないことを証明できない、例えば、去年なんかは原発をほとんど使っていないのに乗り切ったじゃな

いか」と。我々が言っているのは、一年のことじゃないんです。一世紀、二世紀に渡って安定供給をしつづけない限りは、数万人死んだりするような事態になってしまうんです。一年も欠かさず供給する、ということが重要なんですね。その点でいうならば、私たちの未来予測はもう、完全に認められていて、2020年には、アジアで56%ものエネルギーを中東に頼ってしまうという...今よりも倍のエネルギーを中東に頼ってしまう。つまり、リスクが増大してしまうんです。中東がくしゃみをしたらもう、こちらでは核爆発が起きるような事態が、多分起きてしまう、というのが、2020年の状況なんですね。こういった状況では、例えば現状で乗り切ったような事態であっても乗り切れるという保証は全くない、ということです。原発がなければ、中東依存というのは...エネルギー不足というのは、必ず起きる。「いつ起きるか分からない」という話をしていましたが、簡単に言いますと、十年以内に必ず起きます。もう、経験的に証明されているんですね。1970年から、中東戦争、イラン・イラク戦争、パレスチナ問題、イラクのクウェート侵攻、で、もういっぺん、パプアニューギニアの子どもブッシュがイラクに攻め込んで...もう、五、六回起きているんです。30年だけでも5、6回起きていることが...まあ、5年に一回くらいで見積もってもいいくらいのところで、何の備蓄も備えていないようなことになりかねないんですね。

そういったことに加えて、メリットの2番目が非常に重要で、原発の輸出を止める、ということに関して、彼らは基本的にあまり、止められない、という話はしていないと思うんですが、売ることができた後に関して、メンテナンスが維持できるか、これが非常に重要なポイントになるんですね。彼らは言いました。「日本は技術があるから、結局、メンテナンスというのはやりつづけられるのではないのでしょうか。」それは、技術者がいればできるでしょう。でも、考えてください。既に言ったように、原発を作るには10年くらいかかります、最低でも、40年間回します。で、20年間廃炉のためにかかるんですね。要するに70年間かかるんです。今技術のある人が、70年後に生きていますか。90歳のよぼよぼの爺さんを、技術供与として送るんですか。そういったことというのが、実は肯定側の政策なんですね。そうではなくて、最後まで...パンドラの箱を開いてしまった国家は、最後の希望を封じ込める責任がある、それが、否定側のシステムだと思います。原発を、国内では作り続けて、やむを得ず引き受けて、世界全体での、原発の爆発のリスクを低く押さえる、という名誉ある国家になろうじゃありませんか。否定側に一票お願いします。

肯定側第二反駁：小西卓三

それでは、最後のスピーチを行いたいと思います。

非常に重要な点、というのは、エネルギー...これは繰り返しになりますけれども、安全性に関しましては否定側も認めているように、原子力発電というのは、非常に危険な物である、と。ですから、このようなものをやめる、ということは非常に重要である、ということと言えます。

そして、他国の犠牲、ということに関しましては、基本的に...これは先ほども述べたことですが、まずもってこれは私企業が、今もう、売る動機付け、というのを持っていて、政府と組んでやろうとしている状況ですけれども、それを外国が買うか否か、というのは基本的に外国の政策の問題ですから、そこまで、はっきり言って、基本的に責任を持つ必要はない。買った場合は、そのリスクを背負って、外国は買うわけですから、それは外国の問題であり、日本がとやかく言う必要はない。だから、買うのをやめなさい、ということはいえないと思います。

それで、安定供給の話ですね、安定供給に関しては、非常に、問題になる点...日本に関しましては、まず、問題は起きない、ということをお願いしたいと思います。それはなぜならば、長期的に見て、エネルギー需要というのは、伸びていかないわけですから、そのような状況では、代替発電方式をとっていくことで...もしくは今ある設備を十分動かしていくことで、十分な発電量を確保することができます。ですから、非常に重要になるのは、アジアの他国を踏まえた上で、中東の依存度が高まることでどれくらい危険か、ということになると思いますけれども、この点に関しましては、依存度が高まるのが非常によくない、と言ってましたけれども、基本的に、今まで戦争という、一番危ない状況というのは起こってきていて、それでとりあえず、今までも供給はされてきているわけですから、戦争している国家に関しましても、基本的に経済活動としては続けていかなければいけないわけですから、売る、という行為はしてくるであろう、と。実際、否定側のポイントとして、述べていないことは、供給自体が全くできなくなる、ということは、立証がなされていないわけですから、とりあえず、確かに不安定になる、ということはあるかも知れませんが、それで、実際どれくらい悪いことが起こるか、というのははっきり言って、良く分からない、と言えます。

そして最後に、リスクの分析ですね、この事について、話をしたいと思いますけれども、原子力発電というのは、一刻も早く止めた方がいい、と。それはなぜならば、立論から述べているように、一基の原子力発電機で、その中に、広島に降った千倍の灰というのが、一年に溜まっていく、それを50基分、日本の中に持っているわけですから、これは、一刻も早く止めるという手段をとった方が、安全という面では、一番良い行為であると言えます。そして、輸出に関しては、他国...日本ですね、日本以外にも、他国が売れるかも知れないわけですから、他国が売った場合というのは、はっきり言って技術供与というのはずっとやっているといます。問題になった場合、日本の炉が売られたときに技術供与していただけるか、という問題ですが、ここの点に関しましては、人的資源は問題あるかも知れませんが、技術的な資源に関しては、問題ないといえます。それは、なぜならば、日本は原子力発電を始めて、終わる、というプロセスを...終える廃炉までのプロセスというのを、今まで経ていくわけですから、その中で起きてくる、経験的な問題や知識とか、どんどん溜まっていくわけです。ですから、そこで得た知識というのを、他国に対して与えていく、ということ是可以なわけですから、そういった点で、メンテナンスの問題というのは、それほど大きな問題とならない、と言えます。ですから、安全、ということを踏まえた上で、一刻も早く、原子力発電がなくなると良いかな、と思います。以上です [拍手]